

留学生の声

塾内在籍高校・学年(派遣時)	湘南藤沢高等部 5年
留学先高校名	Shrewsbury School
留学期間	2018年 9月から 2019年 7月まで

留学を志した時期はいつ頃ですか。

部活の先輩が一期生としてイギリスに留学されていたことで本制度を知りました。海外での生活や英語が話せることに対する漠然とした憧れは中学時代からありましたが、この留学制度の応募条件のハードルの高さを知ったときは自分にチャンスがあるとはあまり思えず、真剣には考慮していませんでした。しかし、高1になり中学時代を振り返ったり将来について考えたりする中で、楽しいだけではない、何かに繋がる実りある3年間にしたいと考えたこと、加えてある程度の英語力がついたことで応募できる可能性を感じられたことが決め手となり、そこから本格的に留学を意識して物事に取り組むようになりました。

留学を振り返って

全てのことが私の最初の漠然とした想像を超えてくる、充実していて楽しい時間でした。Shrewsbury Schoolは500年近い歴史と伝統があり、イギリスと国外の様々な地域から多様な生徒が集まる、まごうことなき「名門校」でしたが、生徒たちは無駄に気負うことはなく、広大な自然に囲まれてのびのび過ごしている印象でした。勉強に特化した進学校ではなく、アカデミックに秀でた人、スポーツの全国代表選手、音楽の道を志す人、など様々な方向性に広がる才能の持ち主が大勢いました。また様々な価値観に触れるという点では、特に宗教・人種への意識、ジェンダー観がかなり刷新されたと感じています。私が履修していたTheatre Studiesではフィクションの物語を、Global Perspectivesという科目では現在起こっている事象を通して、これらのテーマを学ぶ機会がたくさんありましたし、普段の冗談のレベルから話題になることもあって、全体的な意識の高さに驚きました。ただし、差別や偏見がないということではなく、日本だけで生活してきた私にはショッキングなことがあったり、これだけ高い教育を受けてきた人たちでも偏見を持っているという事実には驚くこともありました。

課外活動は何をしていましたか？

課外活動のオプションが多く、バラエティに富んでいて、1年間自分をとにかく忙しくさせたいと考えていた私にはとても魅力的でした。さらに生徒のモチベーションをあげるための奨励制度も充実していて、実際に私も最終学期に全校生徒の中から6名選ばれる「優秀賞」を学長からいただくことができ、1年間の努力を認めていただけたことが嬉しかったです。

<Rowing (ボート) >

1年間継続して週二回、学校のすぐ横を流れるSevern川にてRowingをしていました。Shrewsbury SchoolはRowingの名門校で本格的にやっている人もいましたが、私は初心者コースで一から教えてもらうことができ、漕ぎ手だけではなく、Coxという操縦者も経験しました。Coxとして出場した大会では漕ぎ手の4人を鼓舞し、スピードや力加減の指示をしながら、ボートを操縦するというCoxならではの難しさを感じましたが、改めてチームをまとめることのやりがいを実感した時間でもありました。

<聖歌隊 (Chapel Choir) >

週2回練習をし、毎週日曜の全校生徒参加のサービスで赤と白のローブを着て宗教曲を歌っていました。地元の教会だけでなくOxfordまで遠征に行ったり、学校のコンサートでオーケストラと共演して歌ったりもしました。一番印象的だったのはクリスマスのキャロルサービスで、キャンドルの灯りのみの空間がとても美しかったことを覚えています。これまでキリスト教とは無縁でしたが、毎週のサービスや歌を通して宗教観を理解する良い機会になりましたし、信仰の有無に関係なく、文化や伝統として生活に根付くキリスト教の側面を知ることもでき、視野の広がりにつながりました。

授業について

選択した4つの科目を週8時間ずつ受けるシステムで、扱う範囲の広さ・深さ、宿題の多さ、エッセイだけで小問の全くないテストなど日本との違いに戸惑い苦労したこともありました。しかし10人程度の少人数

で活発に議論がなされる授業と自分の興味のある分野を集中して学ぶことができる環境のおかげで、素直に勉強が楽しいと思うことばかりでした。

<Math>

講義と演習メインでその点は日本とほぼ同じでしたが、少人数である分、疑問点はすぐに聞くことができました。クラスは成績順で4クラスほどに分かれていて、クラス替えもたまにありました。

<History>

週5コマの中世イギリス史と3コマの近現代アメリカ史に分かれていて、特にイギリス史は一つ一つのトピックを深いところまで扱いました。日本では古代から現代までの「流れ」を学習しますが、こちらでは授業と宿題で大量の文献を読んで、歴史的事実に対する「なぜ」を追求し、理解することが求められました。

<Theatre Studies>

通称 Drama と呼ばれ、国語的な要素(演劇の SCRIPT 読解とエッセイ)と、実技的な要素(グループワークでの劇制作とそのパフォーマンス)から構成されていました。パフォーマー養成のためではなく、アカデミックに演劇を学ぶことが目的なので、エッセイでは物語の内容とともに歴史的背景を理解した上で、演技者・演出者・デザイナーの視点から書くことが求められ、さらに実技も含めて常にクリエイティブ性が大切になる、あまり経験したことのない難しさがありました。しかし、3ヶ月以上かけてグループで一から劇を作って上演したことは、一番の思い出になるほど達成感のある出来事でした。



<Global Perspectives>

前半に幅広い社会問題について取り上げて、クラスでディスカッションをしながら学んでいき、後半にそれらのテーマから自分でさらに詳細なタイトルを決め、別々のタイトルで論文とプレゼンテーションを作成しました。それ以外ではクリティカルに文献を批評する能力がテストで問われました。

今後の派遣留学生へのアドバイス

私が一番大事だと思うのは、自分が留学に行く目的を改めて確認し、楽しみなこと・挑戦したいこと等を明確にすることです。心配事は多いと思いますし、行ってみて想像と違った、ということもあるとは思いますが、自分が何のために来たのかという軸がブレなければ、簡単なことでは心は折れませんし、臨機応変に物事に対応できると思います。私自身「視野、世界を広げたい」「そのためにたくさんの人と話したい」という意識で渡英しましたが、慣れないアクセントなども影響し、「聞き取れない、喋れない」という根本的な壁にぶつかってしまいました。そこからは「英語を一刻も早くモノにする」という短期目標を立て、多少無理してでもその目標を常に意識することで、最終的には最初の目標を達成することもできました。

また、自分からたくさんの人に声をかけられる積極性と気さくさも大切です。自分のコンフォートゾーンを飛び出すことはとても勇気がいりますが、その最初の一步が後のコンフォートゾーンを作ります。1年間ずっと緊張して過ごすことになってしまうと苦しいこと気疲れすることばかりになると思うので、特に初めは「自分の居心地の良い場所を作るため」の行動が取れると良いのかなと思います。

この派遣留学の経験は誰もができることではありませんし、周りのサポートがあってこそなので、自分の想像力を働かせて、日本から送り出してくださった先生方、友人、そして家族のことを思い、その上で一日一日を大切にできれば、何があっても振り返った時に後悔することはないと思います。最後になりますが、本当にかげがえのない経験が待っていると思うので、貴重な時間を思いきり楽しんでほしいです。

以上